

小川芋銭は、牛久が生んだ画聖です。河童の絵描きとして、特に知られています。

世の中が大きく変わろうとする明治元年に、芋銭は武士の子として、東京に生まれました。

明治4年、廃藩置県により、一家は農業で生計を立てるため、牛久に移ります。豊かな水をたたえた牛久沼や田園風景は、芋銭の人と芸術の基となりました。

芋銭の描いた絵画は、奥深い教養に裏付けられた南画（なんが）と言われるものです。しかし、初めから南画を描いたのではなく、絵を描くことの基礎を洋画に学びました。その後、中国の絵画などに興味をひかれ、独力で南画家への道を拓きました。



河童の碑建立当時の風景 牛久小川家蔵

小川芋銭 (おがわ うせん)

1868-1938



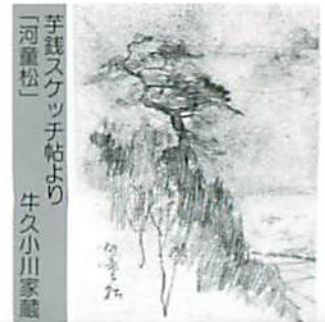
牛久沼で舟遊びを楽しむ芋銭
心を許した友と楽しい時を過ごし、思わず笑みをこぼす。
芋銭の優しさがにじみ出る貴重な写真。 牛久小川家蔵

「弱者に対する思いやり」と「東洋風の非文明思想」が芋銭の思想の根幹を成していました。数多く描かれた桃源郷のような農村風景は、このような思想に裏付けられています。

芋銭は生まれつき体が弱く、しばしば幻覚などにも見舞われました。山や水辺に棲むといわれる妖怪たちは、確かに芋銭には見えたのでしょう。これらの幻想絵画も、芋銭芸術を特徴づけています。

一方、芋銭は書においても優れた才能を発揮しました。豊かな教養と相まって、「書画一致」とは、まさに芋銭芸術を指す言葉であります。

画聖は、牛久で71年の生涯を閉じました。



「河童の碑」は、芋銭を敬慕する人たちによって、昭和27年5月25日に建立・除幕されました。

写真は建立当時のもので、まわりの風景が、現在とは随分異なっています。

雲魚亭 (うんぎょてい)

雲魚亭は、芋銭のアトリエ（兼居宅）として建てられました。昭和12年9月末から芋銭はここに入り、画家として更に研鑽を積みました。

しかし、わずか4ヶ月後の昭和13年1月末、脳溢血で倒れ、再起を願いつつもついにその望みは叶わず、永遠の眠りにつきました。

芋銭生誕120年記念祭に際し、遺族から牛久市に寄贈され、以後「小川芋銭記念館」として、一般に公開されています。



牛久市蔵

河童の芋銭を代表する「河童百図」のうちの1図。

芋銭最晩年の昭和12年の作品。絵の中に描かれた「遊戯三昧 (ゆげさんまい)」が、芋銭の境地を表しています。

